

比較文學研究

化身の万華鏡——谷崎潤一郎の大正後期
小品群をめぐる一考察……………榎 敦子 (1)

『アイヴァンホー』の変容——『撒克遜劫後英雄略』
と『梅蕃餘燕』における人物描写をめぐる…張 競 (30)

『金閣寺』——現実と復讐……………鶴田 欣也 (60)

新聞に見る岩倉使節団のバリ滞在……………松村 剛 (76)

島崎藤村『幼き日』の世界……………盧 英 姫 (97)

「寒山拾得」新注・補正……………古田島洋介 (109)

『夢十夜』第十夜の豚のモチーフについて……………尹 相 仁 (113)

——絵画体験と創作の間——

[書 評]

『焰の女——ルイズ・ラベの詩と生涯——』
(沓掛良彦)……………猪俣 賢司 (121)

『中江兆民のフランス』(井田進也)……………田所 光男 (128)

『ジョイス研究——家族との関係に見る作家像——』
(宮田恭子)……………松田 伸子 (132)

『再生する樹木』(弥永徒史子)……………新井 潤美 (137)

*Nature and Identity in Canadian and Japanese
Literature* (ed. by K. Tsuruta & T. Goosen) ……榎 敦子 (140)

Le Rond-Point

中區の住まい——陶淵明の住環境をめぐる表現
を中心に……………松田 伸子 (150)

プーナ通信(3)……………小倉 泰 (156)

金泰俊先生出版記念会……………鄭 応 洙 (163)

日本再考ヴェネチア会議に招かれて……………稲 賀 繁 美 (165)

「謎」としての人種……………シオドア・グーセン(澤入要仁訳) (173)

国際比較文学学会ミュンヘン大会参加の記……………加納 孝代 (175)

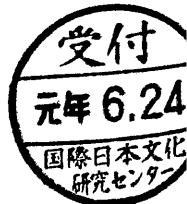
ミュンヘン会議に参加するの記……………平川 祐弘 (181)

エドモントン便り……………大 澤 吉 博 (185)

欧文要約……………(1)

55

東大比較文學會



日本再考ヴェネチア 会議に招かれて

— 昭和六十二年十月 —

稲賀 繁美

本学会は、三年毎に催される日本学会議
—— 前回のパリ大会の様子は伊東俊太郎先生
の手で本誌五十号に活写されている—— の間
の謂わばつなぎとして行なわれる副次会であ
るが、それでも第一部門「文学と視覚藝術」、
第二部門「社会科学」、第三部門「イデオロ
ギーと思想」、第四部門「言語」と分かれ、
三日間で八十に達するペーパーが全て英語で
読まれた。以下小生の傍聴するを得た第一部
門に限って報告させていたたく次第である。⁽¹⁾

第一日目十四日午後の演題は漱石、高橋和
巳、安部公房、大江健三郎、それに明治中期
の社会小説。ハイデルベルクの Livia Monnet
女史は英仏日語を完璧に駆使する闊達な才女
であったが、戦後政治思想史の背景を充分に

踏まえた上で三島由紀夫と高橋和巳を対置し、後者の「敗北」性に言い及ぶあたり、常識的ではあるが、この主題を破綻なく論じ得る日本人が何人あることか。またバフチンと中上健次をはじめいくつかの比較考察軸（あまりの早口で以下ノットにとれず）を彼女が提唱するや、ポーランドのメラノウイチ教授があまりやまず、最近の大江、安部、中上、井上ひさし、村上龍および春樹さらには小松左京、西村寿行へ至るまでに通底する、ある終末論的問題意識を取り上げて質問を返すあたり、ここに集まった外国研究者たちの現代日本文学に対する読みの速さとしたかさには、いささか舌を巻いた。同様の設定はつい半年前パリで蓮實重彦教授の講演を聴くまで、評者にはまったくあずかり知らぬ事柄であったからだ。パリ住いの身として、件の小説のどれひとつとして繕いたこともないから、いきおい発表後の雑談ともなれば、当方は偶然読みとばした新聞の文藝時評か何かを頼りにあやふやな論陣を張って対応するの他なく、心細くもおこがましいことはなほだし。モネト女史には、よくご存知ですね、などからかわれる始末だから、日本人も楽ではない。

大江の自我構造を論じたブルガリア *S. S. S. R.* アロスのしたたかさの前にしては、他の発表がいささか霞んでしまったのもいたしかたない。

東海大学の建築家アゲマツ・ユージ教授は、今日の日本建築の傾向を論じて、そこに縄文対弥生の対立項が並存しているとの分類を試みたが、これは和辻の「アポロの対ディオニソス的」に遡る七十年時代遅れの方法論ではあるまいか。桂離宮を弥生的な日本古典典とするこの通念に対しては、それが近代の要請した虚構的言説であったことを、あっけなく暴き出してパロディ化した悪者井上章一の近著を掲げて、論者の反論をいささか意地悪く期待した小生であったが、残念乍らこれは時間不足で果たせなかった。とまれ同氏の示した、ヴェネチアのカナル・グランデに面した建築コンペの提案は、あたかも未完の家屋の上に清水の舞台を重ねた印象があり、この若き建築家の心意気まで見通せるようで、実すがすがしかった。

今ひとつ困ったのはヴェネチア大学の北斎 *Gian Carlo Calza* 教授の発見譚である。北斎においていかに署名が当てにならぬかを説いて、日本の真贋観を通してみた東西美術思想比較論になるかと期待して聴いていると、

Poppea 夫人とは二日目終了後ヴェネチアの町を夕暮に散歩しながら、お得意の日本語で大いに論じ合ったが、大江のまじめな読者でもない小生にこんなお相手の動まったのは、もっぱら何冊かの名仏訳、それに今春パリで大江の行なった講演のお蔭である。そこで作家は自らを「渡辺一夫先生」とバフチンの結節点たる終末論者と規定していた。

さて、しんがりのカリフォルニアは *Chia-ing Chang* 教授のおそろしく専門的な社会学小説研究に対して、マックギル大学の *Sandra Buckley* 教授がまことに実証的な手きびしい批判を即席で堂々と加えたのには圧倒された。内容は小生名を耳にしたこともない新聞記者に関することとて、恥しいかな皆目不如意。ほとんど評者失格。さて、その時はまだ知るよしもないが——翌日の彼女自身の発表は、あろうことかこれが一転して、フェミニスト・イデオログの教条まる出だった。日本の漫画を江戸の春画以降全て文脈無視のイメージ資料に解体した上で、これを女性蔑視型マスコミ戦略にまつわるゴッフマン流の類型学に押し込め、実に見事な———とか手前

これが全て、自ら「発見」されたポストンの旧ビゲロ・コレクション中の無款の鳳凰を「真筆」と主張するための手段だった。困るというのは、論者が自らの議論の本末転倒に一寸も気づいておられぬことである。これには発表のあとで、これまた北斎狂のペテルノッリ博士とひやかしに行ったのだが、近年パリで「発見」された北斎肉筆と同様の肉づけまである不思議な板絵だ。発見者が作品に酔っておられるのだから議論にならない。作品はすばらしい。こんなすばらしいものは北斎にしかなれない。だから「真作」なのである。いやや北斎はおそろしい。

この分科会のしめくくりは映画評論家 *Max J. Coseriu* 氏による現代日本映画についての全く落度のない見事な展望であった。質疑応答にもその浩瀚な映画の記憶をそれとなく引き出して見せては、ヨーロッパ第一人者の力量を充分に見せつけた。個人的に雑談してみるとむしろ仏語より英語の方が達者なのではないかという感触を抱いた。彼にとどまらず、*Leon Zolbrod* 氏の語り、*Leonard Protko* 氏の歌舞伎修業に至っては、並みの日本人にはとても太刀打ちなど可能でない。粹人の前では当方の野暮を取じるばかりであるが、こう

勝手なと言いか——精神分析的言説に織り直して自論の証拠に供するその手ぎわがあまりに堂々と自信に溢れ独善的なのは、いささか気圧されて気分が悪くなった。どうやら美しい美女が日本では公開禁止のストライドを堂々と映し（幸か不幸か機械が合わず全てピンボケだった）、こういうアジ演説を雄弁かついささかも臆するところなくブツのが、米大陸での女性解放論者にとっては一種おきまりの信条宣言なのだろう。

亡き上村一夫など彼女の十把ひとからげに押し込められては、浮かんでも浮かばれまいと思ったから、一寸反論を加えてもみたかったが、君子危キニ近ヨラズ。なにしろフロイトの解釈に必要なが日本の漫画には得られぬ図像は、エルンストやマグリット、ダリからちやっかり借用しておきながら、これをちくちくと見るでもあろう観衆の反論に先手を打ち、かくして東西対比による比較をも実行したのである、と居直られては、正直返す言葉もなかった。

日本のコミックにおけるエロティシズム分析に名を借りて、日本文化の女性差別を糾弾するこの勇ましい自己＝西欧中心主義の磐石の如き楽天性と、反論を封ずる論理構築の了した雅を事とする名譽日本人たちと、ただの日本人とではどちらがより日本人なのだろう。当方は、小西甚一氏の説を借りて俗物の居直りを決め込んだ。

この居直りに助太刀がふいと現われ、ほっと一息つくことになる。野人的風貌も豊かな広島出身の画家棚谷照氏の発表である。日本の画家として世界にも申すという一見当たり前な行為が、実はいかに絵描きの特権であることか。工業大国頭でっかち日本には一見なくもがなの尻尾として、とかく前ばかり見るエノノミック・アニマルの視野狹窄と國際的不釣合とを緩和するいわば反近代、反進歩のパラスタナリ *分銅* などの役割りを荷うことこそ日本人画家の責務と任ずる同氏は、また島国の記憶収蔵庫としての特色と、過程を重視し超越的目標を等閑視する日本的思考の線状性とを自らの制作の基本に据え、みごとに自意識の活動としての「絵画思考」を展開した。その朴訥たる英語の雄弁もあって、絶大な好評を博した棚谷氏に、久々で借り物ならぬ思考の強さを見た思いがした。

第一日午後の発表の中では *Imela Hiyaya*

Fr. Schmeier 教授が日本の文藝用語の「乱れ」について外国人研究者の立場から感じざるを得ぬフラストレーションを実に明快に定式化してみせた。彼女やモネット女史はじめ一般に若手のドイツ系女性日本学者の英語力にはおそれるべきものがあって、外国人にはアメリカ人の発音よりもよほど聴取容易という事情もあるけれども、また用語とか定義とかにあえてこだわること、慣例のうちに眠り込んでいる盲点や曖昧さを暴き出す能力は、大陸の学者にこそ期待できても、アングロサクソン派の良識をもってしては、とかくなおざりにされやすいところでもある。ヒジャ夫人自身、文藝用語とか時代区分の問題など「さめたコーヒー」であることは先刻ご承知なのだけれど、小生としてはむしろ日本人が何かの間違いで思いつきづいでに付けたマヌキのキャッチフレーズ——山本健吉も第三の(男ならぬ)新人など何のことやらわからぬと白状している——を生真面目に正面から取り組んで困惑してみるのには、実は日本理解のためにはさぶる大切な一歩ではないかと思う。

評者自身、今年春のボンビドー・センターは「日本の前衛」展をめぐる論争の中で痛感したことであるが、この議論は「文学とは何たり得た次第。皆様に改めて感謝申し上げます。つづく Kurt W. Radtke 氏の佐藤春夫論は、筆者自身の機材あとかたづけの為、残念乍ら拝聴できなかった。ここでは最後の Barbara Rohd 教授の発表に言及するにとどめる。

生存当時は有名でありながら、ついに伝記研究の対象として今まで日本文学研究者の手ではまともに調査されることになかった二人の中世に生きた日本女性を語ることで、男の学問の土俵には乗らない女人の世界という裏側に、新たな方法的の可能性まで読み込む。それは実に心にくも滋味深いお話をルーシユさんはされたのである。日本ではむしろ奈良絵本の研究者としての名が知られているかと思われこの婦人を、てっきり単なるまじめな文献学者だと思ひこんでいただけに、その視野のしたたかさと、また折り折りの質問につれて示される、脱構造主義理論を自家薬籠中のものにして、その根拠を未開拓の日本文学史の内に見いだしては、厳密さの上ない文献学を太らせてゆくその学識には、舌を巻く段階を通り越して、まことに驚嘆するばかりであった。

つづく夕べは、立食パーティーの会場、スクオーラ・サン・ロココのティントレット壁画

か」という議論と同じ不毛さに至り兼ねない。志賀直哉は小説ではない。だから文学としては論じられぬ(志賀を俳句に、小説を藝術に置換するも可)等々。だがむしろ階層的カテゴリーに体系化される樹状ヒエラルキーを形成する構築性を全く欠如している日本の文藝およびその用語のメヌエ的なかがわしさこそ、すぐれて日本的な事象なのであり、こうしたそもそもの枠組のなさ(Rahmenlosigkeit)——鼓常良がこの用語をドイツ語で案出したのも決して偶然ではあるまい。著者のこの情報にはヒジャ夫人から打てば響くような返事をいただいた)の中で自由にレットルをはり換えては楽しんでる融通無碍で遊戯的な「国文学」研究風景そのものが、「日本文学」研究というコチタキ文学科学的態度(Literaturwissenschaftliche Forschung)にそぐわないのではあるまいか。

そもそもエクレクティックな対象に迫るのに非エクレクティックな方法に徹し切ることには可能でしょうか、といった素朴なレヴェルでの矛盾(ただし構造主義は全てこのとり違えを應用した知的遊戯だと評者は考える)をどうするのですかと、同日夜のパーティーの席で酔いに任せてからんでみると、彼女は破生の大天井傑作群に見おろされる中、我々、借り切りで室内楽の演奏を堪能した。Hilf die Piacenza 演奏するところの曲目はヴィヴァルディ、アルビノーニ、ガルツピ、マルチエロからブラッティに至るヴェネチア十八世紀のソナタとコンチェルトであって、いささか平板な演奏ぶりがかえってこの場に似つかわしい。

十六日金曜日。最終日は、前日閉会のおりにキーンさんも軽口をたたいたように、八時半開場という「早朝出勤」である。

まずカリフォルニア大学の Reg. Berg 教授の社会行動心理学的見地からする幽玄論。明快な英語だが、内容は、日本的なる「言うに言われぬもの」を楯にとつて日本の外交・政治・企業レヴェルの対人行動を説明するもので、いささか何を今さらと思わざるを得ぬ以前に、そもそもこうした説明努力のあり方が、非日本人そして非日本学者に、日本排斥の為の一論拠を提出する格好の貢献として逆利用されてしまうのではないかという疑念が去らなかつた。

つづいて谷崎の英訳者として知られる Amy

顔一笑のち、真顔で、このつづきをやるつもりですから貴方も参加して下さい、とおっしゃった。何かお応えしたいものである。こうした用語の内包と外延の大切さは、ロンドンの Philip Haines 氏の悲劇性に関する比較文学的考察にも顕れた。ギリシア悲劇をはじめとしてラシーヌもシェイクスピアも同列にさてはトマス・ハーディーまで西欧の悲劇の例として挙げたのでは、それを源氏と比するにせよ近松と比するにせよ、しよせん議論の土俵が割れてしまう。おそれるべき暗唱量を誇るハリス氏には申し分けないけれど、その文藝的経験主義的教養がかえって理論的掘り下げを曖昧にしている恨みなしとしなかつた。

さて小生自身はヴェネチアに着いた夜カフェで書きなぐった英文をたずさえて、発表予定欠席者のところに、組織者とチエアマン(たまたまキーン先生)のご理解を得て二日目午後割り込ませていただいた。学会に欠席者はつきものである。参加を要請されているがら事務上の都合で発表のできる確約の得られぬままでの参加であったが、即席の補充員

Henry Chambers 教授の、日本のアイロニーは翻訳可能かとする問いかけ。アメリカ式の早口で閉口したが、あとで先方から声を掛けられて話してみると、その方がよほどおもしろく、またちよつとシャイなほどに控え目な好物とわかつた。日本語の統辞的特性として、アイロニーが語の選択で決定されるというよりむしろ話法に依存し、またそれをアイロニーと受け取るか否かが、登場人物、話者読者のそれぞれの視点のずれに相関的である以上、訳者は常に訳し過ぎるか訳し足らぬかの間で躊躇する他ない。チェインバース氏によればサイデンステッカー訳の源氏では、物語のというより話者の次元に立った原文解釈に、訳者自身のアイロニーがいささか必要以上顔を出すと云う(本誌52号訳出の石黒ひで論文参照)。

彼の示した具体例には翻訳のやっかいな様子がたしかに痛いほど伝わったが、その困難を挺にとういか逆手にとつて、新解釈を提示する(例えば阿部良雄教授のボードレール訳や渡邊守章教授のラシーヌ解釈)でもなければ、逆に翻訳という不可能事のグロテスクさを掘り下げる(ヘルナール・フランク教授の『今昔』仏訳に際する決然たる意志)方にも進ま

ず、先日 Robert Dandy ミシガン大学教授の翻訳論ともども、若干影の薄い黒子としての翻訳者に徹することに仁徳を見いだす演者の遠慮深い人柄の良さに、かえって食い足りぬものを感じたのでは天邪鬼だらうか。

源氏は谷崎より訳し易いなどとおっしゃるから、シフネル訳の仏語源氏では原日本語の自由間接話法がごとく古風なフランス式間接話法に還元されてしまっている件を持ち出し、こうした話法のレヴェルで干渉の発生しないことこそ翻訳のアイロニーを掘り下げてごらんになってはいかがでしょう、なぞと生意気な提案もしてみた。実際、比較的这个干渉の発生しにくい英語では源氏の話法上の特殊性はそのまま代置可能であるがゆえに、英文読者には意識されにくく、それだけ余分に訳者が話者になりかわって皮肉っぽくふるまう必要も生じるであらうし、逆にフランス語のように翻訳文体には文法的破格を許さぬという規範性の強い国語では、翻訳時の干渉度が訳者にこそ身を切られるほど感じられても、かえってそれゆえ仏訳読者には、源氏の話法の特異性が隠蔽されることとなり、既に英国では『トリストラム・シャンデー』で実現された技法が、フローベールからブル

の意見をラフラーさんに呈してみると、このいささか俳優政治家的風貌にも事欠かぬ偉丈夫は呵々大笑、大いに興味を示して下さった。午前第一部のしんがりにはブリティッシュ・ロンドン大学は日本の日本狂 Leon. M. Zolbrod 教授である。一日目から何かにつけて手を掲げては四角の黒眼鏡の奥で眼をきよろつかせ、意想外だが的を得た質問を繰り出す、この色黒の、細身の割によく通る声をお持ちの紳士が話の材料に選んだのは、芭蕉の文に蕪村が絵を寄せたとされる、逸翁美術館蔵の一幅、「杵の折れ」である。予想通り分裂気質の人で、話がやたらと飛ぶし、一種奇矯な英語もあって、聴衆は皆脈絡を把握するのに苦勞しておられたが、要はこうした詩画の同居と共働とにヴィクター・ターナー言うところのコミュニタスの顕現を見るところの論点であり、さらにそこには歌舞音曲の要素も介入せずには居ないと言いが早いから、ふところからさつと扇を出して、芭蕉の一文を謡いに託し、一節ごとになりなつてみせて、あとはヤンヤの喝采であった。

こうした文藝間の相互浸透と「反構造」に日本文化の型ならぬ型を認める根拠認識は評者もまた共有するところであったので、一席

ーストに至る革新にまつる神話抜きには理解され得ない、といった転倒をもまき起こすこととなる。十一世紀の人類の古典にジョイス的ないしブルーストの口吻が登場してはスキャンダルなのであり、これとは好対照にもあの、原文ではキーン先生も揶揄された悪文翻訳体の大江健三郎が、仏訳ではそれはみことな古典的フランス語にすんなりとおちついてしまいい、ダンリー氏言うところの(言語間)距離を距離として訳文に反映させるといった提言が、皮肉にも裏切られてしまうこととなるのである。

さればこそ、印刷公刊される翻訳結果よりも、教室でのぎこちない訳読の過程で一人一人が意識せずにはいられない犠牲のうちに、文学的アイロニーの本質が棲み込んでいく。近松、西鶴に至っては、翻訳は原文の重層性の中の一枚の薄皮をなんとか破らずに移して横文字にできれば上出来だろう——といったところで我々は意見の一致を見た次第である。つづくカリフォルニア大学の William LaFollet 教授(本誌読者には既におなじみである)は六道絵の餓鬼についての考察。赤毛の発生、腹部の膨張と、生理学的に正確な飢餓の様態の描写されていることを根拠に、中世

のあと雑談がてら、その非構造化をそのまま非構造的に演じて、しかも反論をも見事に封じてしまった彼のパーフォーマンスに讃辞を呈したところ、同氏は得たりという表情になった。一見して日本風の体さばきの習いがあると思っていたが、それがお能の稽古だったことも判って、あわせて話もはずんだ。

* *

ユーヒー・ブレイクのあとは、カリフォルニア大学の銀髪も精悍な Herbert Putschow 教授による言霊論。自らの名を名のる行為が県主としての資格表明であると同時に大和朝廷への服従のしるしでもあるという、『風土記』の命名行為にみられる発語と被支配の二重性を枕に、言霊から密数のマントラに至り、はては相撲取りの醜名が縁の地の神に力を頼む魔術的思考にその起源を持つという話まで、実に豊かな言霊文化史の鉱脈が示された。

また『問はず語り』のブルガリア語訳者として知られる Tsvetana Kriveva 教授は「袖うちぬれて」の暗喩を題材とする和歌論に、パーバラ・ルーシニ教授の評を借りれば、着物に metaphorical signifier を設定する魅力あふれるポニティックの一篇を展開した。和

の仏教圖像学の知識はむしろ今日の我々の自然科学的知識を内包するものであったとする座標軸の変換を提唱するラフラー氏は、従って例えば火を食う鬼は当時の知的パラダイムにおいて腐敗現象を説明している方便である、といった斬新な解釈を下した。

だがこの魅力的な新視座は、見えるもの(イデオロギイ)なるものとの区別を納得させるには、いささか合理化がゆきすぎたばかりに、かえって中世的説明の豊かさを西欧近代科学のパラダイムに還元してしまうという倒立に至っているとの印象をぬぐえない。むしろ評者が見者なり幻視者という観点に執着して見たのは、六道絵においても苦行者にのみ餓鬼が見えるという設定があるからでもあり、またラフラー氏を聴くうちに、ふとポードレールがかのシメールを歌った散文詩が頭をよぎったためでもある。

六道絵とはむしろ当時の人々にとつての現実であり、その解釈の表象体系だったと理解する方が妥当なのではあるまいか。またラフラー氏の示唆した、六道絵とロマネスク彫刻群との同時並行の類縁性については既に今を去ること三十年前、秋山光和先生に自稱「若気の至り」の論文が存在する。——等々

歌の評釈などとはどうやら異語たる外国語を介して試みた方が、解釈・被解釈言語間の距離に由来する立体感も克明となり、また詩の基体をなす母語への構造的依存も捨て去り得る長所があるのではないかと、この外国人の英語ならではの硬質で繊細な語感に富んだ発表に耳を傾けながら思ったものである。否それのみならず、ジョナサン・カラー言うところの、意味の文脈依存性と文脈の脱依存性という構造的不均衡に由来する解釈の解放性を手がかりに、そして結語にはデリダの一節を(読者なら何をお引きになるどころだらうか)配するあたり、脱構築学派を借用して一論文構築の起結を決めてみせるその手ぎわの心憎さには、今までの東欧学者のイメージをはるかに脱した、西欧学界に対するしたたかな自信までも窺うことができた。

こうして、何やら西欧的方法論の網をすり抜ける対象、大上段に振りかぶって論ずるには適さぬ事ども、旧来の意味での学的成果に結実するというよりは等閑に付されがちな周辺的話題が、我々の目の届かぬところで秘かに結びつき、いかにも女性的と言ひにふさわしい、負の構造なり反構造を頭わに仕じめた。形をなさぬこのひかえ目な形象たちが今

後ますます日本文化を研究する外国人研究者たちにとって意想外の射程をもった方法的挑戦の出発点となってゆくことだろう。実はキーン教授の「日記」文学への傾注も、この文脈の中ではじめてその隠された意義の一斑を開示する。

* *

昼食ののち最終セッションはリディン教授の司会の下で演劇に割り当てられた。まずクレンモントの Leonard Prolo 教授の、歌舞伎から現代劇に至る日本演劇への通人ぶりと傾倒ぶりには舌を巻いたが、それは、講演後これまた劇気違いのベテルノッリ博士と近藤映子女史を前に立ち話の花が咲くまでは、まだそのほんの片鱗をのぞかせていたにすぎなかった。一人一人の役者のクセや特徴が、身ぶり手ぶり声から足さばきまで動員して再現される。品原役者を評する同氏の言葉の喚起力と眼の輝き。どうやら日本研究は純学問的研究の枠には収まりきれぬものと見える。

学問的に衆目の関心を集めたのが、最後に壇に立ったボン大学の Thomas Leims 氏の新説である。曰く、歌舞伎の起源は日本人の南蛮趣味昂じての、新案キリスト教祭礼ベイ

ジエント模倣なり、とする。一六〇四年の東国臨時祭と出雲の阿国の関わりを時代推理小説顔まけに、ローマのジュズイット会文書から『東寺記』に至る文字通り世界的規模の史料博搜を通じて浮かびあがらせてゆく迫力はなかなかのもので、いかんせんこのように綿密な仮説提出には二十分の時間制限があまりに苛酷であったのが惜しまれる。

考えてみれば歌舞伎者の風流踊りが南蛮風俗と無関係だったと考える方がおかしい位であるし、これはライムス氏はご存じでなかったが、皆川達夫氏によればオラトリオの日本への影響は明白だという。念仏踊りにジュズイットの立ち混じるのを咎める記録文書がいくつか残っているのも、逆に両者の相互浸透を裏づける。もちろん歌舞伎を純ヨーロッパ産と決めつけるのは行き過ぎであって、例えば「南蛮」という足運びのように、おそらくは中国起源の所作が、当時の南蛮ばかりの中であってヨーロッパに引き付けられた名を授かって今に至っているらしい例のある点を小生も質してみたが、むろんライムス氏の意図も狭義の影響論にあるのではない。南蛮ぶりとしての歌舞伎の成立が、しかしその影響うんぬんを越えて、むしろその変容ぶりのなか

にすぐれて日本的な藝能のあり方を映し出ししており、それが今日では日本民衆演劇の典型となっている事態こそが、ライムス氏をして驚嘆せしめる由縁のものなのである。

* *

この胸のすくような議論をもって学会は無事閉会式へと移行した。いかにも即興といった面持のキーン教授が「世の中にありうる限り非民主的」に、とおどけて首頭をおとりになり、アドリアナ・ボスカロ教授はじめ、組織者一同に花と記念品を手向けてその労をねぎらわれた。三々五々散会するうちに小生もラフラーさん、ハリスさん他のグループに招かれ、土地の人しか来ない近くの小料理屋で議論深更におよび、欲談尽きようとしなかった。いささか個人的旧懐に流れた由縁であるが、それもヴェネチアの土地柄に免じてお許しいただければ幸である。

(昭和六十二年十月三十日)

【註】

(1) 開会記念講演にコペンハーゲン大学教授 Ole Lide が安部公房の『方舟さくら丸』を論じた。本稿冒頭に元来はこの講演への拙評も付していたが、本稿入稿時点で既にリディ

ン論文の和訳が公刊されているため、この部分は削除したことをお断りする。「安部公房の国際主義」織田智恵訳「新潮」一九八八年三月号。

(2) 一九八六年バリのボンビドー・センターで企画された『前衛の日本』展に並行して行われた講演会。これについては別稿(未発表)にゆまゐ。同じ機会に催された別の講演会で加藤周一は日本に終末論的思想は不在であるとお断言したが、それがここに列挙した今日の日本小説の構想は舶来で過ぎぬことになるのだらうか。Kaô Shûichi, "Le temps et l'espace dans la culture japonaise", *Cahiers pour un temps, Ecritures japonaises*, Centre Georges Pompidou, 1986, p. 37.

(3) *Cinéma et littérature au Japon*, Centre Georges Pompidou, 1987 の脚注。

(4) 拙稿 "L'impossible Avant-Garde au Japon", *Connaissance et réciprocity*, Presses universitaires de Louvain, Clac éditeur, 1988, pp. 197-208.

(5) この段詳細を戻せながら、本誌五十四号の岸田俊子氏の学会報告(一六四—一六五頁)および、『現代思想』一九八六年四月号の拙稿「日本心性史の試み。モリス・ベンゲ『日本人の意志的な死』を読む」を参照してください。

(6) この点中山貞彦氏の仏日翻訳比較研究と本誌五十四号訳出のムルハーン千栄子氏の論文とを批判的につき合わせる必要があるが、具体例分析が不可欠なため別の機会に譲る。

(7) 『比較文学年誌』に発表予定と聞く。皆川達夫氏のオランダ研究も最近ようやく公刊さ

れたのは記憶に新しい。『オランダ紀行』日、本基督教団出版局、一九八一年刊。
(昭和六十三年十二月追記)